

平成22年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ケンサキイカ

学名 *Loligo edulis*

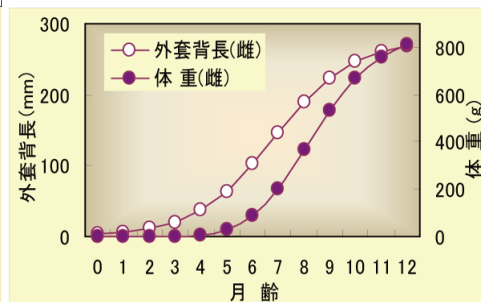
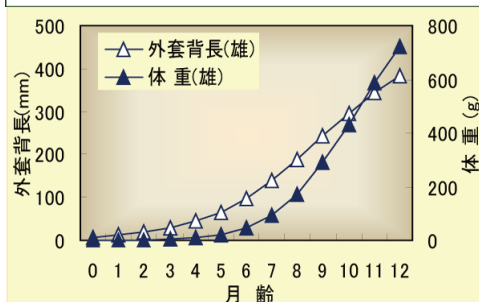
系群名 日本海・東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 1年
成熟開始年齢: 外套背長70～80mm(約5カ月)
産卵期・産卵場: 周年産卵するが、産卵盛期は春～秋季
索餌期・索餌場: 複数の発生群が存在し、それぞれに回遊経路は異なると考えられている
食性: 小型の魚類、甲殻類、軟体類を捕食
捕食者: 不明

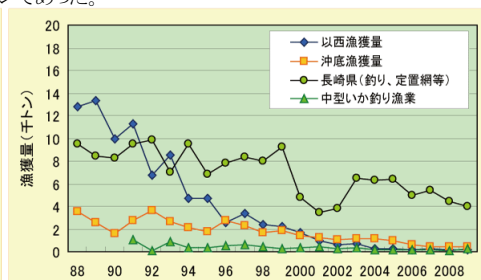
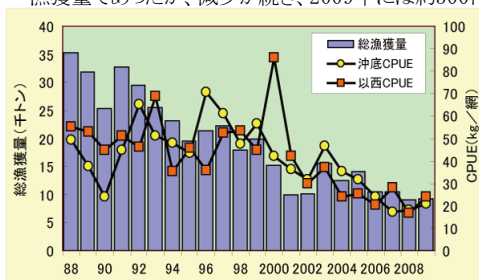


漁業の特徴

沿岸域では主にいか釣り漁業によって漁獲され、総漁獲量のうち長崎県が大きな割合を占め、盛漁期は夏季である。日本海沿岸域では盛漁期は夏から秋にかけてである。沖合域では底びき網漁業が主体となり、沖合底びき網漁業(以下、沖底)では長崎県沖合～山陰沖の広範囲に漁場が形成される。東シナ海では大陸棚縁辺域に南北に広くケンサキイカが分布し、主な漁場は東シナ海南部の陸棚域で以西底びき網漁業(以下、以西)によって形成されていたが、2004年以降は、以西は夏季に操業せず、漁業形態が大きく変化した。また、1991年からは東シナ海において中型いか釣りによる操業が6～10月にかけて行われ、中心となる漁場は東シナ海南部である。

漁獲の動向

日本海西部～東シナ海における本種の漁獲量は1988年には35千トン余りであったが、変動しながら減少し、2001年以降は10千トン前後の漁獲量となり、2009年には約9千トンであった。九州西岸～日本海西部にかけては1988年の約24千トンから変動しながら減少し、2009年には約9千トンであった。一方、東シナ海南部は1988年には約11千トンの漁獲量であったが、減少が続き、2009年には約300トンであった。



資源評価法

以西、沖底、中型いか釣り漁業、および沿岸域でのいか釣り漁業の漁獲動向から資源動向を判断した。沖底では漁獲努力量に減少傾向がみられることから、CPUE(網数あたり漁獲量)を資源動向の指標と考えた。以西でも、努力量が急減していることから、2003年のケンサキイカ有漁漁区について過去にさかのぼって漁獲量と努力量を計算し、CPUEを求めて経年変化をみた。沿岸域については各県代表港のいか釣り漁業CPUEおよび漁獲量を資源状態の指標として考えた。

資源状態

CPUEは、以西は横ばい、沖底は減少傾向で、いずれも低い水準にある一方、東シナ海南部で主に操業する中型いか釣り漁業のCPUEは2009年には前年を大きく上回った。各県代表港におけるいか釣り漁業のケンサキイカ漁獲量およびCPUEの水準は異なるが、おおむね中～低水準とみられ、最近5年間で見ると横ばい～減少傾向にある。主要漁業のCPUEを総合して算出した来遊量指数は最近5年間(2005～2009年)の年ごとの変化率は平均1.02／年で、横ばいである。

動向

水準

→

高位

中位

横ばい

低位

管理方策

ケンサキイカ資源には複数の季節発生群が存在することが知られており、豊度の高い発生群を利用し、豊度の低い発生群を守る管理が理想的である。2004年以降はかつて主要な漁場となっていた東シナ海南部における漁獲量が落ち込んでいるが、この海域には中国船も多数出漁しており、漁獲の実態を把握するのは困難である。現状では資源の指標値にあわせて漁獲することが現実的であろう。

	2011年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	9,200トン	1.0C2009	—	—
ABCtarget	7,400トン	0.8・1.0C2009	—	—

資源評価のまとめ

- 資源水準は低位、動向は横ばい
- 2004年以降以西底びき網漁業は東シナ海南部漁場にほとんど出漁せず、この海域における漁獲量が落ち込んだ

管理方策のまとめ

- 現状では資源量の指標値に合わせて漁獲するのが現実的であろう
- 東シナ海全域での資源状態の正確な把握には、関係国間の協力が必要である

執筆者: 依田真里

資源評価は毎年更新されます。